

療養支援実習IIにおけるルーブリック評価基準の妥当性の検討

著者	紀ノ岡 浩美, 生島 祥江, 岩切 由紀, 谷口 由佳, 阿児 馨, 松岡 真菜
雑誌名	神戸常盤大学紀要. 別冊
号	14
ページ	8-8
発行年	2020-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1492/00001119/

療養支援実習Ⅱにおけるルーブリック評価基準の妥当性の検討

紀ノ岡浩美¹⁾

生島祥江¹⁾ 岩切由紀¹⁾ 谷口由佳²⁾ 阿児 馨¹⁾ 松岡真菜¹⁾

2008年の中央教育審議会答申で、能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が提唱され、学士課程教育ではその評価ツールとしてルーブリックの活用が進んでいる。目標の達成状況を明確に示すルーブリックは、他の手段では困難なパフォーマンスの評価で、一貫性のある客観的な評価ができるため公平性と客観性が確保される。また、評価基準の明示や即時的で詳細なフィードバックから学生の理解が深まるとされている。

看護基礎教育課程は、看護職者としての知識・技術・態度を形成する過程であり、専門職者としての自覚を育む場である。中でも臨地実習は学内で既習した内容を自らの体験を通して学ぶものであり、看護実践能力の育成にとって重要な位置を占めている。その一方で実習体験での学生個々の学びの質を客観的に評価することは困難で、教員の価値観や信念が影響すると言われている。

本研究の目的は、ルーブリック評価の利点から療養支援実習Ⅱの評価に導入し、作成した評価基準の妥当性を検討することである。

研究方法は、事例研究である。2019年度療養支援実習Ⅱ履修生の内、受け持ち患者が1名で、実習中欠席のなかった学生の評価から無作為に抽出した8事例の内、研究協力に同意を得た学生の成績評価について、実習担当教員が評価の根拠とした要点と、設定した評価基準との対応を検証する。

1) 保健科学部看護学科 2) 関西国際大学保健医療学部